

KDLスタッフが選ぶ！ 今月のおすすめ資料

2025 November

11月25日は国連が定める「女性に対する暴力撤廃の国際デー」です。女性や女兒に対する暴力のない明るい未来を象徴する色「オレンジ」は、この取り組みのシンボルカラーです。

女性に対する暴力には、配偶者や恋人などからの暴力をはじめ、性暴力、ストーカー行為、売買春、人身取引、セクシュアル・ハラスメントなど、さまざまな形があります。**暴力の形は時代とともに変化し、見えにくくなっているものもあります。**

文京区では、毎年11月25日を「文京オレンジデー」とし、啓発キャンペーンを行っています。

暴力を見逃さない社会を、一緒につくりましょう。



この作品は、コンゴ東部で紛争による性暴力の被害を受けた女性たちに寄り添い、治療と支援を続ける産婦人科医デニ・ムクウェゲの活動を追ったドキュメンタリーです。被害者へのインタビューや治療の様子、被害少女を収容する学校、強姦案件に関する討論会などを通して、虐殺と性暴力が日常的に繰り返される深刻な現状を浮き彫りにします。

思わず目を背けなくなる映像もありますが、ニュースでは伝わらない現実を知る貴重な機会となるでしょう。

※暴力や死の描写を含むため、鑑賞の際はご注意ください。



AV出演強要、意に反したグラビア・ヌード撮影、リベンジポルノなど、インターネットを通じて更なる拡大する「デジタル性暴力」。本書は、AV業界や性産業、さらにインターネットを利用した性暴力に関する相談に取り組むNPO「ぱっぷす」がまとめた、深刻な実態や裁判で明らかになった法的課題、被害者の証言を収録した貴重なドキュメントです。

性暴力の現状を知り、自分や周りの人を守る視点を持つとともに、性暴力の形態や社会の対応を考え直すきっかけとなると良いでしょう。



戦時中、北満州の日本軍「慰安所」に17歳で連行され、数年間にわたって性暴力の被害を受けた李玉先さん。長き沈黙を経て1994年、14人の仲間とともに来日し、日本政府に対して公式謝罪と個人補償を求めるため、被害者自身が主体となる闘いを始めました。

本作は、在日朝鮮人2世の女性監督朴壽南が、被害者たちの“沈黙”を破る声に寄り添い、その日々の闘争を長期に渡って丁寧に記録したドキュメンタリー映画です。

※戦争、性暴力、強制連行などを含むため、鑑賞の際はご注意ください。



本書は、人種・階級・セクシュアリティ・障害など、さまざまな抑圧の構造と結びつきながら形づくられる欲望を、政治の問題として鋭く問い直します。インセル、#MeToo、同意、オンライン・ポルノ、セックスワーク、監獄主義など、多様なテーマを通して、性をめぐる権力と制度的不平等を鮮明に浮かび上がらせます。

「同意」という枠を超え、性的欲望や行為を「自由／抑圧」「望む／望まない」と単純化することなく、私たちの社会をどう変えていけるのかを考えるための重要な視座を提供する一冊です。



架空のメキシコの小さな村で、人々に恐れられ、嫌われ、噂されながらも、どこかで頼られていた「魔女」が死んだ。その死をめぐって語られる村人たちの声が重なり合ううちに、貧困や暴力、性や階級の不平等が浮かび上がっていく。

息をのむような長い文体で、女性たちの身体と声がいかに抑え込まれ、沈黙を強いられてきたのかを、怒りと哀しみをもって描き出す、世界的な注目を集めるスペイン語圏の傑作です。



主人公キム・ジウォンは、結婚出産を機に仕事をやめ、育児と家事に追われる日々を送っている。幼いころから理不尽な男女差別にさらされてきた彼女は、実家では弟ばかりが優遇され、職場では女性であることを理由に昇進の機会を奪われた。それでも“普通”を受け入れていた彼女だが、心は次第に限界を迎え、まるで他人が乗り移ったような言動を見せ始める――。

“普通”の女性の人生を通して、現代社会に根づくジェンダー不平等を浮かび上がらせた話題作です。